

## 不安, 抑うつ, 怒りの感情誘発場面の分析

筑波大学心理学研究科 鈴木 常元

筑波大学心理学系 佐々木雄二

An analysis of emotion-provoking situations of anxiety, depression, and anger

Tsunemoto Suzuki and Yuji Sasaki (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

This study was conducted to examine similarities between anxiety, depression, and anger in emotion-provoking situations. In study I, a total of 108 experiences of three emotions were collected from 36 students, and those emotion-provoking situations were classified into 15 categories. The relationship between the three emotions was not clear. In study II, 36 students were presented with those situations collected in study I, and the students reported induced emotions. Emotion-provoking situations that induced both anxiety and depression, and those that induced both depression and anger were relatively frequent. However, situations that induced both anxiety and anger were rare. These findings suggest that anxiety and depression are similar to each other, and that depression and anger are also similar with regard to emotion-provoking situations. In particular, the similarity of depression and anger in present studies is discussed in relation to depression theory in psychoanalysis.

**Key words:** emotion-provoking situation, anxiety, depression, anger.

これまで不安, 抑うつ, 怒りといった感情は, 精神医学, 精神分析学の領域で中心的に扱われてきた。本論文では, これらの感情を誘発する場面について分析を行った。感情現象は感情を誘発する場面を含めて成り立っており, 感情誘発場面の研究は重要であると考えられる。

精神分析のうつ病理論は Abraham (1911) および Freud (1917) の研究に始まる。Freud はうつ病患者にみられる罪悪感, 自責といった特徴に着目し, この臨床的事実からうつ病論を發展させた。そして, 「他者に向くはずの攻撃性が自己へ向け変えられること」がうつ病を引き起こす特殊な病理機構だとしている。その後, 質問紙を用いた実証的研究でも, うつ病の改善に伴い, 敵意も減少することが報告されている (e.g., Blackburn, Lyketso, & Tsiantis, 1979; Fava, Kellner, Munari, Pavan, & Pesarin, 1986)。ここで問題となるのは, 不安神経症患者との比較研究

などはこれまで行われていないことで, この攻撃性の問題がうつ病特有のものであると明言することはできない。

一方, うつ病と不安神経症との間にもかなりの類似性がみられる。精神医学の文献をみると, 両者がどのような点で鑑別可能であるのかについて多くの研究がみられる。今までのところ, 患者を一時点での横断像で捉える研究では, この2つの疾患が十分に鑑別可能であることを支持する研究が多い (e.g., Gurney, Roth, Garside, Kerr, & Schapira, 1972; Roth, Gurney, Garside & Kerr, 1972)。また最近では, 恐慌性障害に抗うつ薬が有効であることが発見されて以来, 恐慌性障害とうつ病との関連が注目されている。

以上のように, 精神医学, 精神分析学などの領域では, 不安, 抑うつ, 敵意などの感情がよく取り上げられ, それらの違いや関連性などが議論されてき

た。

感情語の研究に目を向けると、特にわが国にみられるように、不安と抑うつとの分離は困難である(e.g., Imada, 1989; 寺崎・岸本・古賀, 1992)。これとは逆に、感情語の因子分析研究では、敵意や怒りと関連した言葉は、不安や抑うつと関連した言葉とは異なる因子として抽出されている。このことは、怒りや敵意は、不安や抑うつとは明確に区別されていることを表している。また人格検査として現存する不安尺度や抑うつ尺度の間には非常に高い相関がみられており、この2つを区別して測定可能であるかどうかも疑問視されている(e.g., Mendels, Weinstein, & Cochrane, 1972; Dobson, 1985)。

これまでの感情研究では、感情語、生理学的研究、表出行動(表情など)の研究が中心であった。近年の認知心理学の隆盛に伴って、日常的な感情経験が注目されてきている。Averill(1982)は、「怒りの日常経験質問紙」を作成し、普通の人々が日常で感じる怒りについて研究している。人間は日常生活の中でさまざまな感情を経験している。これまでそういった日常的な感情経験について心理学的な研究がほとんど行われてこなかった。そのため、感情の主観的な体験についてのこれまでの知識の蓄積がなく、今後さらに感情経験について研究していく必要がある。Scherer, Summerfield, & Wallbott (1983)やShaver, Schwartz, Kirson, & O'Connor(1986)は、喜び、恐怖、怒り、悲しみなど複数の感情について感情体験を収集し、分析している。特に、これらの感情の誘発場面について分析がなされている。これらの研究の目的は、各感情について中核的な誘因を見いだそうというものであった。しかしその取り上げられた感情からもわかるように、臨床的な観点は研究に含まれていない。また感情間の類似性についてはあまり注意が払われていないなど、本研究とは研究上の視点が異なる。本研究では、特に臨床的な観点から、不安、抑うつ、怒りといった精神病理と関連の深い感情を取り上げ、それらの関連性について検討を加えた。

上述したように、感情語を用いた研究では、不安と抑うつとが非常に類似しており、怒りはこれらとは明確に異なる。しかし、精神分析理論にみるように、抑うつと怒り(敵意)とが、関連しているという研究もある。そうすると一体どこで抑うつと怒り(敵意)とは結びついているのであろうか。ここで感情語以外の異なるレベルで研究していく必要がでてくる。本研究では、パイロットスタディとして、感情誘発場面から3感情の類似性、関連性について検討を加えた。

## 研究 I

研究 I では不安、抑うつ、怒りの感情体験を収集し、それらの感情体験の誘因となった場面を抽出し、その特性に基づいて分類した。特に、複数の感情体験、つまり不安、抑うつ、怒りにわたって共通して表れる場面特性に着目した。これによって3感情間の誘発場面の類似性が検討された。

## 方法

**調査対象** 大学生36名(男性18名、女性18名、平均年齢18.8歳)が調査対象者となった。すべて調査者と面識のない者であった。

**手続き** 寺崎ら(1992)の研究にみられるように、日本人では特に、不安と抑うつが明確に区別されていない。そこで本研究では、不安体験を「不安で緊張した体験」、抑うつを「憂うつで落ち込んだ体験」として、この両感情体験を区別しやすくした。また怒り体験を「怒りや敵意を抱いた体験」とした。

調査は個別に行われた。実験室に入室後、ほぼ次のような教示が説明文によって与えられた：「本研究は、1.不安で緊張した体験、2.憂うつ(抑うつ)で落ち込んだ体験、3.怒りや敵意を抱いた体験、の3つの感情体験についての研究です。上にあげた3つの感情について、その感情を体験した場面・出来事をそれぞれ1つずつ記入して下さい。なるべく最近の体験の中から選び、誰がいつ何をどのようにしたのかということを確認して下さい。」

記入する感情体験の順序については調査者が指定した。順序の組み合わせは全部で6通りあるので、それぞれに6人ずつ対象者が割り当てられた。記入終了後、調査者が対象者の回答文を読み、不明な点について質問し、書き加えた。調査に要した時間は、調査の説明、回答、面接を含めて、30分～90分の間で平均約50分であった。

### 評定手続き

**1. 対象者の記入した場面のまとめ** 対象者の記入した感情体験から誘因となった場面をまとめる作業を行った。調査によって①不安で緊張した体験、②憂うつで落ち込んだ体験、③怒りや敵意を抱いた体験、各36体験、計108の感情体験が収集された。これらの感情体験から、感情誘発場面を以下の点に留意しながら調査者がまとめた。

- ①なるべく場面の具体的な内容を残すこと
- ②主観的な内容をなるべく省き、客観的な内容であること

- ③感情反応を表す言葉を省くこと。ただし、その感情を引き起こす原因となった他者に対する、もともとの対人感情については、この限りではない。

そして調査者がまとめた内容を心理学を専攻する大学院生1名が、検討を加え、改訂した。

また、対象者のプライバシー保護のため、大きな内容の変更のない範囲で、多少の改変を加えた(所属団体の名称等)。これは研究Ⅱで、研究Ⅰの対象者と同じ大学に所属する者に、この文章を呈示するからである。研究Ⅱでは、研究Ⅰでの評定と関連させて検討するため、研究Ⅰと研究Ⅱの文章の内容が全く同じでなければならない。

**2. 分類カテゴリーの作成** 収集された108の場面の特性を調べるための分類カテゴリーを作成した。カテゴリーの作成は、調査者を含む、心理学を専攻する大学院生4名によって行われた。最初に、4名がそれぞれ、1.でまとめられた場面を読み、複数の場面に共通する特性を自由に挙げていった。この時、対象者が感じていた感情(不安、抑うつ、怒りのいずれか)については、知らされていた。それから、4名で討論し、最終的に以下の15項目が選ばれた。なお、この4名が、後の評定手続きを行うため、この時、なるべく本研究で収集された場面为例として用いないようにしながら討論が進められた。

- ①試験・テスト(前及び最中)
- ②人前での発表(前及び最中)
- ③先が見えない(失敗の予期など)
- ④新奇場面
- ⑤場が持たない
- ⑥孤立
- ⑦別れ、残される
- ⑧否定的結果
- ⑨多忙
- ⑩他者からの非難・侮蔑
- ⑪社会的倫理に反する行為
- ⑫他者との意見・価値観のくい違い
- ⑬自分の要求が通らない
- ⑭もともとの対人嫌悪
- ⑮愛情対象喪失の危機

**3. 評定手続き** 評定手続きは、分類カテゴリーを作成した者と同じ者が行った。評定は個別に行われた。1.でまとめられた文章を読み、その場面が当てはまるカテゴリーを①～⑮の中から選択した。選択する際には、その場面で特に中核的なものを選び、3個以内で複数回答を認めた。また、どれにも当てはまらないものについては、無理に選択しなく

てもよいことにした。

**4. 評定者間の信頼性** 4名の評定者のうち、すべての2名の評定者間の組み合わせ(全部で6通り)で、信頼性係数を算出した。本研究での評定の信頼性については、複数選択が認められていたので、単純にパーセンテージによる一致率を算出することはできない。そこで、それぞれ2名の組み合わせ毎に評定の一致した全ての数を求め、これを2名の評定者それぞれの全評定数で割った値を信頼性係数とした。したがって、それぞれの組み合わせで、2つの信頼性係数が算出され、全体で12の信頼性係数が求められた。その結果、信頼性係数は0.59から0.76の間で、平均0.66であった。今回の算出法では、1つの場面につき3つまでカテゴリーを選択可能であったため、一方が3つ選択したときに、他の一方が1つしか選択しないような場合、評定者間の信頼性係数は低くなってしまふ。そのため、信頼性係数の値が低くなることが予想されていた。結果として、信頼性係数の平均が0.66であり、この値は一般的な算出法から見ると高いとは言えないが、本研究の算出法では、十分な値である。評定されたカテゴリーのうち、4名の評定者中3名以上が選択したカテゴリーをその場面での中心的カテゴリーとした。

## 結果と考察

評定手続きでは、複数選択が許されていたので、中心的なカテゴリーとして最終的に選ばれたものが、複数ある場面もあった。その場合、最高で2つであった。また、評定の結果、4名中3名が選択したカテゴリーのない場面が、抑うつと怒りの場面にそれぞれ3場面ずつあった。評定の結果を表したのが、Table 1である。各感情体験毎に、15のカテゴリーに当てはまる場面数が示されている。これをもとに、結果を述べ、考察を進めていく。

**不安体験** Table 1に見られるように、不安体験では、「試験・テスト」(例：大学の入学試験を受けている最中)、「人前での発表」(例：5000人くらい入る会場で吹奏楽を演奏することになった。これから演奏が始まるうとしている)、「先が見えない」(例：サークルの発表会がある。しかし作業が進まず、残りの日数を考えると間に合うかわからない)の3つがいずれも10場面以上となった。今回集められた中では、これらが不安の中核的な誘因と考えられる。対象が学生であったため、特に「試験・テスト」、「人前での発表」が多くなったことが考えられる。また、これらよりはやや少ないが、「新奇場面」(例：部屋のドアをロックする音が聞こえたので開けて

Table 1. 各カテゴリーに分類された, 不安, 抑うつ, 怒りの感情誘発場面数

カテゴリー名	感情体験			合計
	不安	抑うつ	怒り	
1. 試験・テスト	10			10
2. 人前での発表	13			13
3. 先が見えない	12	3		15
4. 新奇場面	5			5
5. 場が持たない	2			2
6. 孤立	1	5		6
7. 別れ, 残される		3		3
8. 否定的結果		9		9
9. 多忙		5		5
10. 他者からの非難・侮蔑		5	9	14
11. 社会的倫理に反する行為			10	10
12. 他者との意見・価値観の違い		1	8	9
13. 自己の要求が通らない		1	5	6
14. もともとの対人嫌悪				4
15. 愛情対象喪失の危機	1	3	1	5

みると, 知らない人が立っていた)も5場面あり, これも不安にとって中核的な誘因であると思われる。

**抑うつ体験** 抑うつ体験では, 「否定的結果」(例: バasketボールをしていて, 簡単なシュートを落としたり, 他人の邪魔になってしまった)が9場面と最も多かった。「否定的結果」には, 失敗などの体験も含まれている。そしてこれに「孤立」(例: 土曜日・日曜日と誰にも接することがなく, 部屋に一人である), 「多忙」(例: サークルとアルバイトが非常に忙しく, しかもレポートが出された), 「他者からの非難, 侮蔑」(例: 変なあだ名のついている先輩がいる。その先輩をからかったときに, 他の先輩にそれはひどすぎると言われた)がそれぞれ5場面と続く。「孤立」による抑うつは, 孤独感とかなり近いものと考えられる。「多忙」は“燃えつき症候群”と関連していることが考えられ, 興味深い。これらの次には, 「別れ, 残される」, 「愛情対象喪失の危機」が3場面ずつあった。この2つは, 内容的にも似ており, 「別れ, 残される」は「孤立」ともかなり類似している。うつ病には, 愛情対象の喪失が関与していることが多いことから, これが, 抑うつの誘因として挙がっているのも納得できる。

**怒り体験** 怒り体験では, 「社会的倫理に反する行為」(例: 自転車を止めていると, ほんの少しの

間に盗まれていた)の10場面を筆頭に, 「他者からの非難・侮蔑」(例: 自動車学校に通っているが, 教官がとても厳しい人である。練習の途中で「これまで何をやってきたんですかねえ」と嫌みを言われた), 「他者との意見・価値観の違い」(母親と社会の価値について話し合っていたが, 自分の持っている「こうあるべき」という考え方と, 母親の持っている大人の考え方とははなはだしく異なった)が, それぞれ9, 8場面と多かった。これに続いて, 「自己の要求が通らない」(例: すでに疲れた状態で電車に乗った。その時, 後ろの席で赤ちゃんが泣きだし, 2時間くらい泣いたまま)の5場面, 「もともとの対人嫌悪」(例: もともと嫌いな人物がいる。その人物が不満をぶつぶつ言っている)の4場面が比較的多かった。「社会的倫理に反する行為」が多かったことに対しては, 対象者が面識のまったくない調査者に, 怒りの感情体験を報告しなければならなかったことが一つの要因であるかも知れない。怒りは, 社会的にあまり望ましくない感情とされる傾向があるので, 他者の社会的倫理に反した行為であれば, 自己の望ましくない部分を調査者にあまり見せなくても済むからである。怒りの体験に対して選択されたカテゴリーとして特徴的であったのは, どれも他者によって引き起こされているということである。不安や抑うつなどでは, 自己がその原因となっていることもあるが, 怒りではいずれも他者その原因に関与している。

また対象者の中には, 「怒ったことはないが, ムツとしたことはある」として, 「ムツとした」体験を報告した者が数名いた。このことも怒りの体験を報告することへの抵抗を表していると思われる。

**感情間の関連性** 15のカテゴリーのうち, 複数の感情にまたがって選択されたものは「先が見えない」, 「孤立」, 「他者からの非難・侮蔑」, 「他者との意見・価値観の違い」, 「自己の要求が通らない」, 「愛情対象喪失の危機」の6つであった。ただし各々の感情体験内で選択された場面が1場面というのは少なすぎ, 2場面以上のもののみを残すと, 残るカテゴリーは「先が見えない」と「他者からの非難・侮蔑」の2つのみとなる。「先が見えない」は不安と抑うつの両方で選択され, 特に不安で多い。将来の予期に対しては引き起こされるネガティブな感情は, 通常不安であると考えられている。したがって, 今回の研究でも, 不安で最も多くなった。抑うつが多少みられたことに対しては, 将来に対する見方がさらに悲観的になると, 抑うつ感の方に移行していくことが考えられる。また「先が見えない」には, 失敗の予期なども含まれ, このことが抑うつ体験で

も出現する原因となった可能性がある。「他者からの非難・侮蔑」は、怒りと抑うつとで、高い頻度でみられた。この場合は、怒りの方でやや多い。「他者からの非難・侮蔑」は、自分が悪いと感じているか、いないかという要因が大きいと考えられる。自分が悪いと感じていれば、抑うつ感になるし、特に自分の方に非がないと感じているならば、他者からの行為を不合理なものと感じ、怒りを引き起こすと考えられる。

抑うつで選択されず、不安と怒りの2感情だけで選択されたカテゴリーは存在しなかった。このことから、誘因からみた場合、「不安と抑うつ」および「抑うつと怒り」の誘因は類似している部分があり、重なりある部分があるのに対して、「不安と怒り」の誘因はほとんど類似性がない、ということが言えてくるのではないであろうか。しかし、「不安と抑うつ」、「抑うつと怒り」についても、両感情にまたがって選択されたカテゴリーの数がさほど多くはなかったため、この点については、やや控え目に述べておく必要がある。

## 研究Ⅱ

研究Ⅱでは研究Ⅰと逆方向の研究を行った。つまり、研究Ⅰで収集された場面を研究Ⅱに参加していない者に呈示し、どのような感情を誘発される場面であるのか、回答を求めた。その結果から、特に、複数の感情を喚起するような場面を調べた。複数の感情を喚起する場面のうち、3感情の中でいずれの組み合わせが多いかによって、3感情の類似性が検討された。

## 方法

**調査対象** 大学生36名(男性18名、女性18名、平均年齢18.5歳)が調査対象となった。研究Ⅰに参加していない者が選ばれた。

**手続き** 調査は、個別あるいは2～3名の小集団で行われた。小集団で行われる場合は、お互いの回答が見えないように、部屋の机を配置した。研究Ⅰで収集された不安、抑うつ、怒りそれぞれ36事例、計108の場面が書かれた、質問紙が配られた。場面の内容は、研究Ⅰで評定に用いられたものと同じものを用いた。研究Ⅱの対象者には、説明文および口頭によってまず次のような教示が与えられた：「以下に108の文章があります。これらの文章には、さまざまな場面・出来事が書かれています。これらの場面・出来事では、一般的に、当事者となった人は

どのような感情を感じるでしょうか。」そして各場面毎に感じる感情を、「不安で緊張する」、「憂うつで落ち込む」、「怒りや敵意を抱く(ムッとする)」の3つの中から選択するように求めた。「怒りや敵意を抱く」については、研究Ⅰで、「怒りや敵意を抱いた体験」を「ムッとした体験」として、記入した者が数名いたので、「(ムッとする)」をつけ加えた。回答に際しては、複数選択が認められていた。その他、「上記以外の感情を感じると思う場合には、その感情名(喜びなど)を具体的に記入すること」、「不快な感情の場合には、上記の3感情の中からびったり当てはまらなくても、なるべく近いものを選択すること」という教示も付け加えた。また、どうしても何も感じないという場合のみ、「何も感じない」という回答を認めた。調査に要した時間は、30～60分、平均約40分であった。

## 結果と考察

108の場面について対象者が回答したが、1/3以上の対象者が回答した感情をその場面で誘発される中核的な感情とした。その結果をまとめたのがTable 2である。ここには研究Ⅰで収集した際の不安、抑うつ、怒り体験毎(以下、結果と考察では「～体験」と表したものは全て研究Ⅰで感情体験を収集した時の感情名を表す。感情名のみのもは研究Ⅱで対象者によって選択された感情名を表す)および全体験で、「不安のみ」、「抑うつのみ」、「怒りのみ」、「不安と抑うつ」、「不安と怒り」、「抑うつと怒り」、「不安、抑うつ、怒り」が中核的感情と評定された場面

Table 2 各感情(複数を含む)が中核的感情となった場面数

中核的感情	研究Ⅰでの感情体験			合計
	不安	抑うつ	怒り	
不安のみ	28			28
抑うつのみ		16	2	18
怒りのみ		3	26	29
不安と抑うつ	6	9		15
不安と怒り	2	1		3
抑うつと怒り		5	7	12
不安、抑うつ、怒り		2		2
なし			1	1

数を表した。またいずれの感情でも1/3を越えなかったものについては、「なし」として表した。

**不安体験** Table 2にみられるように、不安体験の感情誘発場面のうち、不安のみが中核的感情となったのは、28場面であった。全部で36場面であるから、ほとんどは不安のみが中核的感情となっている。不安体験として収集された感情誘発場面については、全場面が不安の中核的な誘発場面となった。これは、研究Ⅰでの文章をまとめる作業が的確に行われたことを表している。

残りの8場面のうち、「不安と抑うつ」の両感情が中核的感情となったのは6場面(例：数学の授業でなかなか問題が解けなかった。そのうちチャイムがなり、周りの皆は解いた問題を提出していく)あったのに対し、「抑うつと怒り」の両感情が中核的感情となったのは2場面であった。この数の差から、不安を誘発する場面は、怒りよりも、抑うつと関連が高いことが考えられる。

**抑うつ体験** 抑うつ体験の感情誘発場面のうち、抑うつのみが中核的な感情となったものは16場面であった。これは不安体験での不安のみ(28場面)や怒り体験での怒りのみ(26場面)と比べると少ない。これに対して、「抑うつと不安」の両感情が中核的感情となったものが9場面(例：あまり親しい友人がいなくて一人であることが多い。誰かに話しかけようと思うがなかなかできない)、「抑うつと怒り」の両感情が中核的感情となったものが5場面(例：サークルの練習終了後、後輩達が自分と仲の悪い先輩とさささと帰ってしまい、自分一人取り残された)と、比較的多かった。また「抑うつ、不安、怒り」の全てが中核的感情となったものが2場面あった。36場面のうち抑うつが中核的感情とならなかったものが4場面あった。この4場面のうち、3場面は怒りのみが、残りの1場面は「不安と怒り」の両感情が中核的感情となっていた。以上の結果から、抑うつ誘発場面は、抑うつだけでなく他の感情も誘発される可能性がある場面が、比較的多いことがわかる。抑うつが複雑な感情であることが伺える。

抑うつ体験では、「抑うつと不安」の両感情および「抑うつと怒り」の両感情が中核的となった場面が比較的多く、さらに怒りのみが中核的感情となったものが3場面あった。これらのことは抑うつが不安とも怒りとも関連が深いことを表している。

また抑うつ体験として収集された感情誘発場面は、36場面のうち32場面で抑うつが中核的感情となった。一方、抑うつが中核的感情とならなかったものが、4場面あった。しかし、このことは必ずしも、研究Ⅰでの文章をまとめる手続きが誤っていた

ことにはならない。研究Ⅰの対象者が記述した体験が、全てにわたって、抑うつにとって中核的な感情誘発場面であるとは限らないからである。

**怒り体験** 怒り体験の感情誘発場面では、怒りのみが中核的となったものが26場面と、不安体験での不安と並んで多かった。また、「怒りと抑うつ」の両感情が中核的感情となったものが7場面(例：小中学生と一緒にキャンプに行った。しかし子供達が自分の言うことを聞いてくれない)あった。しかし「怒りと不安」の両感情が中核的感情となったものは全くなかった。これは、怒りが不安よりも抑うつと関連が高いことを表している。さらに、怒りが中核的感情とならなかった3場面のうち、2場面は抑うつのみが中核的感情となっている。

怒り体験として収集された感情誘発場面では、36のうち33場面で怒りが中核的感情となった。これも研究Ⅰでの文章を作成する手続きが、的確に行われたことを表している。

**全体験** 108の全場面を併せてみると、不安のみおよび怒りのみが中核的感情となった場面は、それぞれ28、29場面とかなり多かった。これに対して、抑うつのみは18場面と、不安や怒りと比べるとやや少ない。このことは、抑うつが他の感情と密接に結びついていることを表している。日常生活でも抑うつの場合は、他の感情が混ざり合って喚起されることが伺え、抑うつという感情の複雑さがこのことから考えられる。

複数の感情が中核的な感情となった場面は、「不安と抑うつ」で15場面、「抑うつと怒り」で12場面と多かった。これに対して、「不安と怒り」は3場面とかなり少ない。これらのことから、「不安と抑うつ」、「抑うつと怒り」は誘因レベルでの関連性が高いのに対して、「不安と怒り」では低いことがわかる。この他に、3つの感情全てが中核的となったものが2場面、どの感情も中核的とならなかったものが1場面あった。

**研究Ⅰとの関連** 研究Ⅰでは、108の場面について、15のカテゴリーに分類した。ここでは、研究Ⅱで複数の感情の誘発場面となった場面が、研究Ⅰで分類されたカテゴリーについて検討する。結果をまとめたのがTable 3である。

Table 3からわかるように、「不安と抑うつ」の両感情が中核的感情となった場面のカテゴリーは非常に多岐にわたっている。その中で、やや多かったものに、「先が見えない(失敗の予期など)」がある。このカテゴリーは、研究Ⅰにおいても、不安体験と抑うつ体験のどちらの感情体験でも多かった。この他、「孤立」、「否定的結果」、「多忙」なども認めら

Table 3 複数の感情が中核的感情となった場面のみに  
 ついての研究Ⅰでの分類結果（カテゴリー番  
 号はTable 1に対応している）

カテゴリー 番号	中核的感情			
	不安と 抑うつ	不安と 怒り	抑うつ と怒り	不安 抑うつ 怒り
1	1			
2	1			
3	4			
4	1	2		
5	1			
6	3	1		
7			1	
8	3			1
9	2			1
10			4	
11			2	
12			1	
13			3	
14				
15	1	1	2	

れた。しかしどれもさほど多いとは言えず、はっきりした結果は出ていない。「抑うつと怒り」の両感情が中核的感情となった場面についての、研究Ⅰでの評定も、Table 3からわかるように、非常に多岐にわたっている。この中で、やや多かったものには、「他者からの非難・侮蔑」がある。これは研究Ⅰでも抑うつ体験と怒り体験の両方でみられるカテゴリーであった。「自己の要求が通らない」、「社会的倫理に反する行為」、「愛情対象喪失の危機」でも認められている。しかし、不安と同様に、特にどれもさほど多い数とは言えない。今回の研究では、パイロットスタディということもあり、あまり多くの感情体験を収集していない。そのことが明確な結果が得られなかった原因の1つと思われる。今後、さらに多くの体験・場面を収集し、検討する必要がある。

この他、「不安と怒り」の両感情が中核的となっ

たのは、わずか3場面だけであった。その中では、「新奇場面」が2つあった。3つの感情全ての誘発場面となったのは全体で2場面のみであった。

### 総合考察

研究Ⅰおよび研究Ⅱの結果より、感情誘発場面では、「不安と抑うつ」および「抑うつと怒り」とが、関連が高いのに対して、「不安と怒り」とは、あまり関連がないことが示唆された。前述したように、感情語の研究や臨床的研究では「不安と抑うつ」とは非常に類似しており、これまでも多くの議論を生んできた。このことから、「不安と抑うつ」とが、誘因研究でも類似していたことは驚くにあたらない。むしろ、「抑うつと怒り」との共通点が多いことの方が、興味を持たれる。心理学における感情理論では、これまでこの両者の関連性についてはあまり触れられてこなかった。これまで抑うつと怒りの関連について述べたものには、精神分析のうつ病理論がある。Abraham(1911)やFreud(1917)のように、精神分析ではうつ病の発生機制において攻撃性の役割を重視する。彼らの理論では、本来他者に向けていたはずの憎しみが、自己に向け変えられることによって、うつ病に特徴的な罪悪感が表れるとしている。攻撃エネルギーの精神力動から、うつ病が捉えられている。精神分析の考え方は、もちろん病的なうつ状態を対象としている。しかし、今回の研究のように、正常者にみられる、日常的な感情体験においても、抑うつと怒りとは関連性が高いのである。感情語の研究にみられるように、我々が通常もっている感情概念では、抑うつと怒りとは明確に分化しているであろう。一方、これに比べると感情の誘因は、日常生活で感情現象を認識する際にはさほど意識されないであろう。したがって、意識レベルでは、両感情間の違いが非常に大きいのに対して、誘因というレベルでは類似性が高い。このことが、感情現象を力動的に認識する精神分析的見地から見た場合、抑うつが「攻撃性の内向」と認識される下地となっている可能性が考えられる。

また1つの場面で複数の感情が生起するという現象の原因について考察すると、次の3点が考えられる。(1)これらの感情が、時間的変化に伴ってある感情から他の感情へと移行していくこと、(2)これらの感情が共に生じやすいこと、(3)これらの感情状態にあるとき心理的退行が促され、感情そのものが未分化な状態にあること。(1)の点については、特に「抑うつと怒り」に関して言えるように思われる。Bowlby(1980)は悲哀の過程を4段階に分けて

いるが、その中で第2段階は抗議や怒りの時期とされ、次の第3段階は絶望・抑うつの時期とされる。ある事象が生じた後、最初怒りを感じていたのが、時間が経つに連れて抑うつへと移行していくことが考えられる。(2)の点については、不安神経症とうつ病の鑑別が問題になること、不安と抑うつに関する感情語が識別困難なことなどから、特に「不安と抑うつ」に関して言えそうである。また(3)については、Bridges(1932)が乳児の感情分化を観察したのを初めとして、感情は成長とともに分化していくと考えられている。不安、抑うつ、怒りのようなネガティブな感情が生じたとき、その感情が強いほど心理的退行が促進されることが考えられる。激しい感情を体験している場合、感情そのものが未分化で識別困難な状態となるように思われる。以上の3点が、不安、抑うつ、怒りの感情を分離しにくくしていると思われ、今後このような観点を含めて検討していくことが望ましい。

### 要約

本研究では、不安、抑うつ、怒りの感情誘発場面について特に感情間の類似性という点から検討を加えた。研究Ⅰでは、3感情の感情体験を収集し、その中から感情誘発場面のみを抜き出し、分類した。その結果、「不安と抑うつ」および「抑うつと怒り」にわずかながら類似性がみられたが、あまり明確な結果は得られなかった。研究Ⅱでは、研究Ⅰとは逆に、研究Ⅰで用いた感情誘発場面对象者に呈示し、不安、抑うつ、怒りの中から感じられる感情を選択させた。結果として、「不安と抑うつ」および「抑うつと怒り」に類似性が認められたが、「不安と怒り」には類似性がなかった。これまで、実証的研究で「抑うつと怒り」の関連を指摘したものがほとんどないだけにこの結果は興味深い。精神分析のうつ病理論では、うつ病の本態を「攻撃性の内向」と捉えるが、誘因の類似性がこのような理論の下地の1つになっている可能性が考えられた。

### 引用文献

- Abraham, K. 1911 Notes on the psychoanalytical investigation and treatment of manic-depressive insanity and allied conditions. In *Selected Papers of Karl Abraham*. London: Hogarth Press, 1927 Pp.137-156.
- Averill, J.R. 1982 *Anger and Aggression: An essay on emotion*. New York: Springer.

- Blackburn, I.M., Lyketsos, G., & Tsiantis, J. 1979 The temporal relationship between hostility and depressive mood. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, **18**, 227-235.
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss*, Vol. III. *Loss, sadness and depression*. London: Hogarth Press. (黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳 1981 母子関係の理論Ⅲ 愛情喪失 岩崎学術出版社)
- Bridges, K.M.B. 1932 Emotional development in early infancy. *Child Development*, **3**, 324-341.
- Dobson, K.S. 1985 The relationship between anxiety and depression. *Clinical Psychological Review*, **5**, 307-324.
- Fava, G.A., Kellner, R., Munari, F., Pavan, L., & Pesarin, F. 1982 Hostility and recovery from melancholia. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **170**, 474-478.
- Freud, S. 1917 Trauer und Melancholie. (加藤正明訳 1969 悲哀とメランコリー 改訂版フロイド選集10 日本教文社 Pp.123-146.)
- Gurney, C., Roth, M., Garside, R.F., Kerr, T.A., & Schapira, K. 1972 Studies in the classification of affective disorders. *British Journal of Psychiatry*, **121**, 162-166.
- Imada, H. 1989 Cross-language comparisons of emotional terms with special reference to the concept of anxiety. *Japanese Psychological Research*, **31**, 10-19.
- Mendels, J., Weinstein, N., & Cochrane, C. 1972 The relationship between depression and anxiety. *Archives of General Psychiatry*, **27**, 649-653.
- Roth, M., Gurney, C., Garside, R.F., & Kerr, T.A. 1972 Studies in the classification of affective disorders. The relationship between anxiety states and depressive illness—I *British Journal of Psychiatry*, **121**, 147-161.
- Scherer, K.R., Summerfield, A.B., & Wallbott, H.G. 1983 Crossnational research on antecedents and components of emotion: A progress report. *Social Science Information*, **22**, 355-385.
- Shaver, P., Schwartz, J., Kirson, D., & O'Connor, C. 1987 Emotion knowledge: Further expolaration of a prototype approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1061-1086.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 1992 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, **62**, 350-356.  
—1993. 9.30受稿—